立命館大学大学院
2023年度実施　入学試験
博士課程前期課程
文学研究科
人文学専攻・文化動態学専修

入試方式	実施月	コース	専門科目 ※英語による問題を含むことがある	
			ページ	備考
一般入学試験	9月	高度探究	P.1～	
	2月		P.5～	
社会人入学試験	9月	高度探究		
	2月			
外国人留学試験 （RJ方式）	9月	高度探究	P.1～	
	2月		P.5～	
学内進学入学試験	9月	高度探究		
	2月			
APU特別受入入学試験	9月	高度探究		

【表紙の見方】
×・・・入学試験の実施がなかった等の理由で入学試験問題の作成がなかったもの、または、問題を公開しないもの
斜線・・・学科試験（筆記試験）を実施しないもの

※試験終了後、ホッチキスで綴じること（太線の4箇所）

2024年度　立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2023年9月9日

博士課程前期課程　人文学専攻
文化動態学専修

「専門科目」

全　6　ページ

●受験上の注意

① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
（ホッチキスを貸与します）
② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

2024 年度入学試験（2023 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （　文化動態学　専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

以下の課題文を読んで、問 1 および 2 に答えなさい。（それぞれの解答の冒頭に問 1・問 2 の見出しを付すこと）

【問 1】〈虚〉と〈実〉について、課題文の中で自分が関心を持った部分をまとめなさい（12 行以内）。

【問 2】課題文を参照した上で、自分のテーマ領域に応用して〈虚〉と〈実〉について論じなさい。

第四章　物語の意味論のために

話のカタルにも元は多数の参加、知識の共同の意味があったのかと私は思う。

（柳田國男『昔話と伝説と神話』）

1　虚実皮膜のあいだ

いったいに「民間語源説」なるものには眉に唾をつけてかからねばならぬものが多いが、「語る」という動詞が「騙る」に由来するという俗説は、その当否の程は別として、われわれの言語活動に内在する微妙な真実を言い当てているように思われる。

確かに日常の生活現場においては、「語る」ことは奨励されても「騙る」ことは厳しく戒められている。すなわち〈実〉が尊ばれて〈虚〉は排撃されるのである。だが、事はさほど簡単でもなければ、明瞭でもない。実際に起こった一つの出来事、例えば東北自動車道での交通事故を取り上げてみればよい。その単純な事実をありのままに「語る」にしても、運転者、同乗者、目撃者、警官、新聞記者等々の立場の違いに応じて、その「語り」には

微妙なあるいは決定的な差異が生ずるはずである。では、誰が〈実〉を語り、誰が〈虚〉を騙っているのか。神の視点からの「語り」をでも想定しない限り、答えはついに「藪の中」になるほかはない。

そもそも「語り手」の〈視点〉なるものは、透明無垢のカメラ・アイのような代物ではない。それは、生活の来歴によって育まれた利害関心の遠近法によって枠取られており、また感受性の歴史を宿した情感のフィルターによって彩られてもいるのである。さらに、われわれが「語り」に使う言葉にしたところで、事実や事態の正確無比な〈写像〉ではありえない。初夏の風の香り、紺碧の海の輝きを正確に相手に伝えようと百万言を費したところで、後には空しい徒労感が残るばかりであろう。だが逆に、一行の詩句が見慣れた眼前の風物を、一瞬にしてこの世ならぬ形象に変ずることも稀ではない。それゆえ、言葉は事実を過不足なく正確に描写する写実の手段ではない。それは常に対象を〈過少〉にあるいは〈過剰〉に「語って〈騙って?〉」しまう気まぐれな変形装置なのである。だとすれば、〈真〉とはもっぱら〈実〉の側に就くものではなく、むしろ〈実〉と〈虚〉との間に存するものと言うべきではないのか。その意味で、ホモ・ロクエンスすなわち「言葉を語る動物」とは、人間が「虚実皮膜のあいだ」を生きる存在であることを示唆する呼称にほかならないのである。

本章の課題は、この「虚実皮膜のあいだ」を生きるわれわれの言語活動の在り様を、

「虚構の言述(fictional discourse)」の考察を通じて明らかにしようとするものである。

確かに〈事実〉と〈虚構〉との間には厳然たる区別があり、われわれのもつ「現実感覚(sense of reality)」[1]のゆるぎのなさは、いかなる哲学者の妄説によっても突き崩すことができないように思われる。だが、言うところの「現実感覚」を、われわれの眼に見え手で触れうる物理的事物にのみ限るならば、われわれは過去や未来の出来事はおろか地球上に存在するはずの赤道や子午線についてすら語りえぬことになるだろうし、また虚数はおろか実数すら使えない仕儀に陥るであろう。それゆえ、現実感覚を「論理学における死活問題[2]」とまで断じたラッセルですら、普遍者ないしは概念を感覚与件と同じく見知り(acquaintance)の対象として認めざるを得なかったのである。

だが、同じく感覚的知覚によっては把捉できない対象ではあっても、普遍者と虚構との間にはやはり厳然たる差異が存在するであろう。「親子関係」や「地球の中心」になら現実世界への通行証を発行する哲学者でも、同じ人間仲間であるはずの「光源氏」や「ハムレット」には断固として入場を拒否するはずである。あたかもそれらが幻か幽霊ででもあるかのように。現実世界を追われた彼らは、いったいどこに安住の地を求めたらよいのであろう。「冥界」にであろうか、それともわれわれの「心の中」にであろうか。だが、「心の中」にと言ってしまえば、せっかく現実世界の片隅に所を得た普遍者や果ては過去や未来の出来事までが、新たなユートピアへの移住をこぞって希望して来るに違いない。しか

し、この地が王道楽土などではなく、哲学者に騙られて入植した対象たちが繋がれている牢獄にほかならないことは、大森荘蔵の年来の議論が徹底した形で明らかにしているところである。[3] 今われわれに要求されているのは、狭隘で排他的な現実感覚の涵養であるよりは、むしろ幾多のさまよえる「ハムレット」たちにカナンの地を見いだしてやる「虚構感覚」の方ではあるまいか。さらに言えば、「虚構感覚」によってこそ、現実世界の構造は逆照射され、また明確な輪郭をもつに至るのである。そのためにもまず、われわれの言語活動の中における「虚構の言述」の位置を確定しておかねばならない。

2　言語行為としての〈虚構〉

常識的な言語感覚に従えば、「騙る」が意図的に他人を欺く行為であるのに対し、「語る」の方はより客観的な事実の描写といった印象を与える。しかし、「語る」ことが「騙る」ことに劣らず、積極的に他者へ向けられた行為であることを明らかにしたのは、オースティンの「言語行為論」であった。彼はこれまでの言語哲学の偏向、すなわち言葉の機能を現実世界の忠実な描写に一面化する誤り(descriptive fallacy)を批判し、言葉を語ることが同時に一つの「行為遂行(performative)」でもあることを示して、言語活動の実践的性格を強調した。オースティンの提案によって言語哲学の対象領域は、猫の額のよう

2024 年度入学試験（2023 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （　文化動態学　専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

な記述的平叙文の縄張りから飛躍的に拡大したが、彼もまた「虚構の言述」だけは、以下のような理由でとりあえず分析の主題からははずしている。

ある種の遂行的発言は、たとえば、舞台の上で役者によって語られたり、詩の中で用いられたり、独り言の中で述べられたりしたときに、独特の仕方で実質のないものとなったり、あるいは、無効なものとなったりする……そのような状況において言語は、独特な仕方で、まじめにではなく、しかし正常の用法に寄生する仕方で使用されている。この種の仕方は言語褪化の理論というべきものの範囲の中で扱われるべき種類のものであろう。われわれは、これらのすべてを一応考察の対象から除外する。[4]

すなわち、虚構の言述は通常の言語行為に対して「寄生的(parasitic)」ないしは「褪化(etiolation)」した形態として二次的、派生的な位置を与えられているにすぎない。

では彼の言う言語行為の「正常な用法」とはいかなるものを指すのであろうか。オースティンは「顕在的遂行発言」の基本形を「第一人称・単数・直接法・能動態・現在形」という文形式に求めている。[5] その理由は、言語行為の遂行に当っては「発言者当人が行為の遂行者でなければならない」[6]ということ、およびそこでは「発言の時点において、発言している人物によって行われる何ごとかが存在している」[7]ということに基づいている。それ

ゆえ、ここでは当の発話主体＝行為主体が代名詞「私」ないしは固有名によって明示的に言及を受けて登場していなければならない。オースティンはこの言語行為の主体を〈発言原点(utterance-origin)〉と呼ぶ。もし明示的な言及が行われない場合でも、「(a)口頭の発言の場合には、その人物が発言を行っている当の本人である」[8]という自己言及的な関係によって、また「(b)文字による発言の場合には、発言者の署名を書き添える」[9]という手続きによって、〈発言原点〉との結びつきが確保されるのである。すなわち、言語行為の遂行が適切に行われるためには、行為主体と発話主体との一致が不可欠の条件となる。オースティン自身が述べているように、そこでは「当該の行為を行う「私」(I)が、全体の構図の中で本質的なものとして登場することとなる」[10]のである。

一見して明らかなように、「虚構の言述」の場合には、この行為主体と発話主体との一致という正常な言語行為に不可欠の条件が満たされていない。すなわち一つの作品の作者〈行為主体〉とその作品の語り手〈発話主体〉とは通常分離しており、むしろ分離していることこそが、虚構が虚構として成立する根本条件だからである。[12]「シャーロック・ホームズ」シリーズの作者はコナン・ドイルであるが、語り手はワトソン博士であることはよく知られている。そして虚構作品の場合、行為主体(作者)自身が「私」として言述の中に登場して来ることは、「あとがき」等の例外を除けばありえない。たとえ一人称の小説の場合であっても事情は同じである。わが国の私小説のような一人称告白体の言述においても、作

者の「私」と語り手の「私」とは別人であり、それが一致しているかのような錯覚を、いわば文学的効果として利用しているにすぎない。告白体とは一つの「文学的制度」にほかならないのである。[13]

では「虚構の言述」は、言語行為論の枠組の中に、いかなる意義と身分とを要求しうるのであろうか。一つの試みとして注目に値するのは、オースティンの言語行為論を独自の観点から発展させたJ・サールの論文「虚構の言述の論理的身分」である。この中でサールは、「虚構の言述」が孕む問題点をパラドックスの形で次のようにまとめている。

虚構の物語の中の語や他の諸要素は日常的意味をもつが、にもかかわらずそれらの語や諸要素に意味を付与し、意味を決定する規則は発動されていない。[14]

すなわち、童話の『赤ずきんちゃん』において、「赤」という語はむろん通常の赤を意味するが、「赤」を現実世界の赤に対応させる規則はその物語の中では発動されておらず、実際的効力をもっていない、というわけである。

サールはまず、誤った見解を批判することから始める。それは、作家は「主張する(assertion)」という発語内行為(illocutionary act)を行っているのではなく、「物語る(telling a story)」ないしは「小説を書く(writing a novel)」という特別な種類の発語内行

為を行っているのだ、という説である。これに対するサールの反駁の論拠は、「一般に、文の発話において遂行される発語内行為は、文の意味(meaning)の関数である」[15]というテーゼに基づく。例えば「わたしは彼をおぼえている」という文は、字義的意味(literal meaning)からは「主張」という発語内行為に用いられるが(法廷における証言など)、同時に「物語る」という行為の遂行にも使われる(ボルヘス『記憶の人・フネス』冒頭句)。だが、発語内行為が文の意味の関数であるのならば、異なった発語内行為には異なった意味が対応せねばならない(一対多の関係は「関数」ではない)。それゆえ、「物語る」という特別の言語行為を認める人は、同一の文がそれによって実現される発語内行為の種類に応じて、異なった意味をもつことを認めねばならないことになる。サールによれば、「フィクションはノンフィクションとは異なった発語内行為を含むと主張したい人は、フィクション作品の中では語はその通常の意味をもたないという見解に組している。……すると言語の中のあらゆる文は、フィクション用の意味とノンフィクション用の意味との両方をもつことになろう」[16]というわけである。これが不合理であることは誰の目にも明らかであろう。

ではサールの与える解決はいかなるものであろうか。彼の第一の結論は、「フィクション作品の作者は、通常は主張型に属する一連の発語内行為の遂行を偽装している(pretend)のである」[17]と定式化される。つまり、「虚構の言述」とは「偽装された主張(pretended assertion)」にほかならない、というものである。だが、「偽装する」はサールも

2024 年度入学試験（2023 年 9 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （　文化動態学　専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

198

言うように志向的動詞(intentional verb)の一種である。したがって、発話者が偽装する〈意図〉をもっていなければ、その行為は偽装であるとは言えない。そこから第二の結論が導かれる。すなわち、「あるテクストがフィクション作品であるか否かを同定する基準は、作者の発語内の意図(illocutionary intentions)の中に当然なければならない」[18]というものである。

以上のサールの提案はそれなりの説得力をもち、またなかなかに魅力的な見解でもある。だが他方で幾つかの致命的欠陥をもつことも事実であり、そのことの指摘を通じて、われわれはありうべき解決案へ向けて歩を進めることとしたい。まず第一に、サールの分析においては、われわれが先に見た虚構の言述の成立条件、すなわち行為主体(作者)と発話主体(語り手)との分裂という事態が正しく捉えられてはいない。「偽装された主張」を行う主体はあくまで当のフィクションの作者でなければならないが、例えばホームズ物語の場合、発話主体はワトソン博士であって作者(コナン・ドイル)ではない。ではこの場合、作者がワトソン博士の口を借りて「偽装された主張」を行っていると考えるべきだろうか。しかし、ワトソン博士自身が行っている行為は明らかに、「主張」ないしは「報告」であって、「偽装された主張」ではない。もしワトソン博士の行為が「偽装された主張」であるとすれば、ホームズ物語はワトソン博士の語る「小説内小説」ということになるであろう。サールの分析は、あくまでも行為主体と発話主体との一致を前提にしている。だがそ

199　第 4 章　物語の意味論のために

うであれば、一人称告白体で書かれた小説の場合、その中に現われる「私」だけは、他の代名詞や指示詞とは違って、「偽装された主張」を行う行為主体、すなわち現実世界の中の生身の作者を指示することになるはずである。しかし、例えばE・A・ポーの『黒猫』に現われる作中の「私」が作者のポーと同一視されることは、未熟な読者を除けばありえないであろう(私はかつて、この「未熟な読者」であった)。虚構の言述を言語行為として位置づけるためには、行為主体と発話主体の自己分裂という事態を的確に説明することが不可欠なのである。

第二に、サールはあるテクストが虚構であるか否かの判定基準を、作者の「発語内の意図」に求めている。すなわち「主張」と「偽装された主張」を区別する基準はテクストないしは発話形式そのものの中には存在せず、行為主体の〈意図〉が唯一のメルクマールなのである。だが、読者はいかにしてその〈意図〉なるものを知りうるのであろうか。手がかりは眼前のテクストあるいは言語行為自体の中にしかないはずである。たとえ作者の頭を解剖してみたところで、その〈意図〉なるものが検出されるわけではあるまい。あるいは、すでに作者が鬼籍に入っている場合、また作者が不詳の場合はどうなのか。サールの考えを聞いておこう。

テクストをフィクション作品として同定するテクスト上の性質、統語論的あるいは意

200

味論的性質は存在しない。テクストをフィクション作品にするのは、いわば、作者がそれに対して取る発語内の構え(stance)なのであり、その構えは作者がそれを書いたり他の方法で構成するときに彼がもつ複雑な発語内の意図の問題なのである。[19]

確かに、あるテクストが虚構であるか否かを判別する形式上のメルクマールを見いだすことは難しい。だがそれを作者の〈意図〉にすべて還元してしまうことは、いかにして読者は作者の〈意図〉を直接に(テクスト上のメルクマールは存在しないのだから)知りうるのかという別のより大きな難問を抱え込むことにならないであろうか。サールの見解は、やはり行為主体と発話主体の分裂という虚構の基本条件を無視した所から来る謬見のように思われる。

第三に、サールの分析では「偽装された主張」と現実生活における「嘘」との間の区別がつきにくいという問題である。確かに彼はこの両者に明確な区別があることを述べ、その理由を次のように説明している。

フィクションに関する独立の規約を理解しない者にとっては、フィクションは単なる嘘と思われるであろう。フィクションを嘘から区別するのは独立した一組の規約の存在であり、この規約が作者をして、欺く意図をもっていないにせよ真でないことを知

201　第 4 章　物語の意味論のために

っている言明を作るふりをさせるのである。[20]

ここで言う「独立の規約」は、また「水平的規約」とも呼ばれている。サールは、通常の言語行為において適用される語ないしは文を世界と関連づける規則、すなわち言語と実在との結びつきを確立する規則を「垂直的規則(vertical rule)」と呼び、それに対してこの垂直的規則によって確立された関係を破るような言語外的・非意味論的規約を「水平的規約(horizontal convention)」と呼んでいる。[21] この規約は話者の発語内行為を世界へと関係づける垂直的規則の働きを停止し、話者が実在へのコミットメントなしに言語を使用することを可能にする。あるいは、読者がテクストをフィクションとして読むときに発動される規約だと言ってもよい。

サールはこの規約の存在を嘘とフィクションとを区別する基準だと考えている。だが、この規約によって成立する区別は、あくまでも言語行為を遂行する話者の側における区別にすぎない。つまり、話者がこの規約を発動させることによって、同じ真ならざる文を発話する場合に、「嘘をつく」という行為から「フィクションを語る」という行為を区別して遂行するのである。それゆえ、ここでも「嘘」か「フィクション」かの区別は、究極的にはこの規約を発動しているか否かという話者の〈意図〉に還元されざるをえない。またこれを読者の側の規約だと解釈しても、読者は当のテクストを「フィクション」として前も

202

って同定していない限り、たとえこの規約を知っていたとしても、テクスト上のメルクマールが存在しない以上、それを読解に当って適切に発動することはできない道理であろう。それゆえ、当のテクストが「嘘」か「フィクション」かを識別する基準としては、この水平的規約は有効には働きえない。話者の側の基準とすれば、それは読者が接近できない私的な〈意図〉に還元されるほかはないであろうし、読者の側の基準とすれば、それは前述のように論点先取を犯してしまうであろう。そもそも「嘘」か「フィクション」かというまぎらわしい事例にこの規約が区別の基準として働きうるのならば、それは当然、あるテクストがフィクションであるか否かを決定する場合の一般的基準としても機能するはずである。ところがサールは、そのような区別の基準が話者の〈意図〉以外にはないことを、すでに見たように明言しているのである。

出典：野家啓一『物語の哲学』岩波書店，2005年，pp. 190-202

※試験終了後、ホッチキスで綴じること（太線の4箇所）

2024年度　立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2024年2月11日

博士課程前期課程　人文学専攻
文化動態学専修

「専門科目」

全 7 ページ

●受験上の注意

① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
（ホッチキスを貸与します）
② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

2024 年度入学試験（2024 年 2 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

以下の文章を読んで、（1）と（2）の両方に答案用紙の４ページ目から解答しなさい。解答を始める箇所に（1）、（2）と明記すること。

（1）この文章に「厳密に文化史に何が含まれるのかを語ることは、さらにいっそう難題となっている」（第７パラグラフの末尾）とあるが、文中で挙げられている文化史のさまざまな例以外に、解答者はどのような文化史が可能、もしくは存在するべきと考えるか。例を一つ挙げて、自由に論じなさい。

（2）文中に「今日、多くの人びとが、二〇年か三〇年前だったら「社会」を語っていたであろう日常的な場で「文化」を語っているのだ」（第６パラグラフの末尾）とある。「文化」という語は多用されていると、著者は述べる。それでは、「文化」とはどう説明できるであろうか。解答者が「文化」という語を用いて自身の研究を説明するのであれば、どうして「文化」という語を用いるのが適切であると考えるか。その理由を述べなさい。

文化史は、かつて学問の世界のなかではシンデレラのように邪魔者扱いされており、より成功を収めた〔政治史や経済史などの〕姉たちから無視されていた。その後、巻末に掲げた年代順の刊行リストが示すように、一九七〇年代に再発見されることになる。たしかに、イギリスに限っていえば、テレビに登場する歴史は、いまだに軍事史や政治史に関わるものがほとんどで、わずかに社会史関連のものがある程度である。だが、そのとき以来、少なくともアカデミックな世界では、文化史はふたたび流行の時期を迎えている。したがって、ほぼ四〇年にわたりこの学問分野を実践してきた私のような人間にとって、こうして文化史に関心がふたたびもたれるようになったのはきわめて喜ばしいことだ。しかし、その理由は依然として説明を要するといえよう。

本書の目的は、この再発見を説明することだけではない。まさに文化史とは何か、より適切な表現を用いれば、文化史家は何をおこなっているのかを、文化史の多様性や文化史をめぐる論争と対立だけではなく、そこで共有されている関心や伝統にも注意を払いながら説明することにある。そうすることによって、対立してはいるが相互補完的な関係にある二つのアプローチを結合させることにしたい。すなわち、歴史学内部での一連の問題を解決することに関心をもつ内在的アプローチと、歴史家が生きている時代に対して何をおこなっているかという点に関わる外部からのアプローチである。

内在的アプローチは、過去に対するかつてのアプローチへの反動として、現在の文化史の再流行を論じている。なぜなら、そうしたアプローチは、とらえどころがないが同時に重要なものを排除してきたからである。この内部からの見方によれば、文化史家はほかの歴史家が到達することができない過去の諸分野を手にすることになる。また、「文化」の全体性を強調することは、現在の歴史学が、人口史、外交史、女性史、思想史、経営史、軍事史などの個別分野の専門家へと細分化したことに対する救済策を与えてくれる。

外在的アプローチや外部からの視点にも、何がしかの問題提起が含まれている。第一に、それは、文化史の台頭を、政治学、地理学、経済学、心理学、人類学、そして「カルチュラル・スタディーズ」などの広範な「文化論的転回」に結びつけている。この点については「エピローグ」でより詳細に論じることにする。少なくともそうした学問分野の限られた学者のなかでは、変わることのない合理性（たとえば、投票行動や消費行為における合理的選択理論）に対する関心からの転換が生じて、特定の時代の、特定の場所での、特定の集団に共有されていた価値観への関心が増大していった。

このような時代を示すひとつの徴候は、アメリカの政治学者サミュエル・ハンチントンが、今日の世界では文化的差異が政治経済体制の相違よりも重要であるという考えに転向していったことである。そ

2024 年度入学試験（2024 年 2 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

の結果として、冷戦の終焉以来、私たちが目にしているものは、国際的な利害をめぐる紛争というよりも「文明の衝突」であるとされている。こうした思想的雰囲気を示すもうひとつの指標は、カルチュラル・スタディーズの国際的な成功だろう。たとえば、一九九〇年代のロシアでは、「クリトゥロローギヤ」（当地ではそう呼ばれている）が高等教育の必修コースとなる。多くの場合、それはロシアのアイデンティティに関心をもち、歴史の経済的解釈から文化的解釈へと転向したマルクス－レーニン主義者の元教授たちによって唱道されることになった[1]。

この文化論的転回は、それ自体が最近の文化史の一部をなしている。アカデミックな領域の外では、それは、アメリカ合衆国でのいわゆる「文化戦争」や多くの諸国で見られる「多文化主義」をめぐる論争だけではなく、「貧困の文化」、「銃文化」、「恐怖の文化」、「十代の文化」、「企業文化」（本書四九頁を見よ）などのような、共通の語彙に表現される認識の転換と結びついている。今日、多くの人びとが、二〇年か三〇年前だったら「社会」を語っていたであろう日常的な場で「文化」を語っているのだ。

こうした言葉の広がりが示しているように、現在では「文化」として考えられないものをあげることのほうがますます困難になっている。歴史研究も、この一般的な傾向に対する例外ではない。文化史とは何か。この問いを公然とおこなったのは、いまから一世紀前の一八九七年、先駆的なドイツ史家カール・ランプレヒトであった。しかし、彼もまた、当時としては少し異端の存在だった。よかれ悪しかれ、その問いは依然として明確な解答を待っている。ごく最近では、寿命、ペニス、有刺鉄線、マスターベーションなどの文化史が読者に提供されるようになった。したがって、このテーマをめぐる研究の最前線が拡張されてきたことは間違いなかろう。だが、厳密に文化史に何が含まれるのかを語ることは、さ

らにいっそう難題となっている。

文化史の定義をめぐる問題へのひとつの解答は、研究の対象からその方法へと着眼点を移すことにあるのかもしれない。しかし、ここでもまた、私たちが見いだすのは、文化史研究の多様性とそこでの論争である。ヤーコプ・ブルクハルト自身も認めたように、文化史家のなかには直観的に研究をおこなっている者がおり、数量的方法を用いているのはごく少数である。また、みずからの研究を意味の発見という観点から特徴づける者もいれば、実践や表象に焦点をあてる者もいる。そして、文化史の目的を本質的に叙述に見いだす者もいれば、文化史は政治史と同様にひとつの物語として提示できるし、またそうしなければならないという歴史家も存在している。

こうした文化史家にとっての共通の基盤とは、象徴やその解釈への関心にあるということもできよう。象徴は、意識的なものであれ無意識的なものであれ、美術から日常生活までいたるところに発見できる。しかし、象徴主義（シンボリズム）という視点から過去へとアプローチすることは、数あるなかのひとつのアプローチにすぎない。たとえば、ズボンの文化史は、同じテーマに対する経済史研究とは異なるであろう。それは議会の文化史が、同じ制度に対する政治史研究とは異なっているのと同じようなものだ。

このような否認する者にとっての混乱、ないしはそれを刺激的なものと見る者にとっての対話の状況のなかで、もっとも賢明な道は、ジャン＝ポール・サルトルの人間性に対するエピグラムを用いて、文化史は何ら本質をもってはないがそれ独自の歴史をもっている、と宣言することにあるのではないだろうか。過去を読みとき記述する行為は、ほかの行為と同様に時代に制約されている。したがって、本書は、絶えず新たなる状況に合わせて永遠に変容を繰り返す文化的伝統のひとつの事例として文化史研究

2024 年度入学試験（2024 年 2 月実施）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏　　名
人文学専攻 （文化動態学専修）	前期課程	専門科目	□高度探究		

を扱い、折に触れて、時代ごとの文化史研究の文化史について論評を加えようとする。

ピーター・バーク（著）・長谷川貴彦（訳）『文化史とは何か〔増補改訂版〕』
法政大学出版局，2019年，pp. 3-7